

# 図書館だより

## 目次

ゲーテ=シラー文書館	——西山 力也	1
追悼 青山吉信先生	——佐藤 育子	2
青山吉信先生を偲ぶ会 大学生と図書館	——吉原三紀子	3
「日本女子大学卒は資料検索能力が秀でている」	——秋元 樹	4
論文教育を支えるライブラリー・ツアー	——佐藤 和哉	5
目白における図書館ガイダンスについて	——飯山 智子	6
西生田図書館における資料検索講習会について	——水嶋 寿恵	7
平成18年度夏期スクーリング開館について	——田代 陽子	8



西生田図書館雑誌コーナー

## ゲーテ=シラー文書館

西山 力也

1885年4月15日最後の孫ヴァルター・ヴォルフガング没、ゲーテの血筋は絶える。詩聖自筆の原稿・日記・書簡などの全てを遺贈されたゾフィー・フォン・ザクセン=ヴァイマル大公妃は、ただちにその編纂刊行に道を開くとともに、同年、整理・保存のためにゲーテ文書館を城内に設立、その後シラーの孫グライヒェン=ルースヴルム家からも同様に寄贈がなされるに伴い、1889年ゲーテ=シラー文書館 (Goethe-und Schiller-Archiv: GSA) として拡充される。1893年大公妃は文書館建設を提案、これを受けて地元の建築家オットー・ミンケルトの設計により着工、1896年6月28日落成、以後、寄贈および購入により自筆原稿の不断の収集が継続されて今日に至る。所蔵文書は、館名となった両詩人の原稿類だけではなく、ヴィーラント、ヘルダー、メーリケ、ヘッベル、インマーマン、ビューヒナー、ハイネ、リスト、ニーチェなど詩人、作家、思想家、作曲家の多数に及び、総数約120名分、個々の自筆文書の数では1900名にもなる。ドイツ最古・最大の文学文書館であり、ゲーテに限っても480箱、全詩作品の約90パーセントの自筆原稿を保有する。補充と新規の収集はもとより、所蔵になった原稿類の文書としての整理・記録が不可欠であり、1989年以降本格的な目録作成と併行してデータベース化も積極的に進められ、いまや国際ドイツ文学研究所としての地位を不動のものとしている。同文書館はもともと歴史的・原典批判的研究に拠る編纂の場であり、その意味では『ヴァイマル版』ないし『ゾフィー版』と呼ばれる『ゲーテ全集』(全143巻)が金字塔として特記される。刊行開始1887年、完結1919年、実に32年もの歳月が費やされたのである。この伝統は現在も同館および同館の協力による著作集や書簡集の出版となって受け継がれている。

城からほど遠くないイルム河対岸の、市を見下ろす高台に聳えるゲーテ=シラー文書館。ヴェルサイユ宮殿庭園の離宮<sup>プチ</sup>トリアノンを手本にした建物は、グレーの砂岩が黒ずんで厳かな印象である。1996年在外研修のさい、私は毎日通った。館員の配慮で専用机ができ、行くと頼んでおいた文献が机上にあった。左手前方の席が作家ジークリット・ダム。この時の研究成果が大著『クリスティアーネとゲーテ』(1998)と『シラーの生涯』(2005)である。当時私はゲーテの小説『親和力』の研究、特に初版からの翻訳に没頭していた。ほぼ訳し終えたものの出版にはまだ遠く、以来10年の歳月に内心忸怩たるものがある。しかし、館内の特別室、そこでゲーテが使ったという『若きウェルテルの悩み』に直に触らせてもらった時の、あの熱い感動は昨日のこのように蘇ってくる。

(図書館長・史学科教授)

## 追悼 青山吉信先生

佐藤 育子

今、手元に数枚の写真がある。青山ゼミの卒業記念旅行で、千葉の養老温泉に行った時のものだ。50代後半の先生と20代前半の私たち学生との楽しい一泊二日の旅だった。各自出し物を交えたプレゼント交換などで大いに盛り上がったその夜、誰かが「また来年も」と言った時、青山先生は、「こういう旅は一度きりだから思い出に残るし、いいのだ」とおっしゃり、結局それ以後、私たちは二度と集まることはなかった。いかにも先生らしいお言葉だったと思う。あれからちょうど四半世紀、先生の訃報は突然に訪れた。その日新聞の社会面は、ある大物政治家死去の話題で持ちきりだった。ふと目にしたお悔やみ欄に先生のお名前を見つけた時の衝撃は、今思い出しても忘れられない。ただ茫然と涙がとめどなく溢れてしかたなかった。



1981年3月 千葉県養老温泉にて

青山先生は1992年3月に日本女子大学を定年退職なさるまで、30年以上の長きにわたって本学で教鞭をとられた。先生の授業で特に印象に残っているものは、3年の時に初めて受講した西洋史演習である。前もって分担を決めず、毎回誰があたるかはその場にならなければわからないという、受講生にとっては相当の緊張を強いられる授業であった。当時、史学科の先生方の中では一番怖いという評判であった青山先生である。皆、ひたすら先生と目が合わないよう下を向き、名前を呼ばれる恐怖の一瞬が通り過ぎるのを待つ。不勉強な私は、友人の頭越しに見える先生のごま塩頭がととも怖かったことを覚えている。けれども、参考文献の挙げ方・書き方から始まり、学問に厳しい先生が私たち学生に徹底的に教えてくださったことは、卒論を作成する際にどれほど役に立ったことか、先生の教えを一度でも請うたものであれば、誰でも皆一様に納得するに違いない。

先生は終戦直前、広島で応召・入隊し、原爆投下直後の広島で街で救援・処理活動に従事された経験を持つ。この時の衝撃的な体験を私たち学生の前で赤裸々に語られることはなかったが、学生一人ひとりに、目に見えないところで細やかな対応をしてくださった先生の後ろ姿に、ご自身の原爆体験は原体験として終生あったのではないかと感じている。

卒論指導当時、すでに『イギリス史研究入門』（山川出版社、1973年）、『アングロ＝サクソン社会の研究』（山川出版社、1974年）、『イギリス封建王制の成立過程』（東京大学出版会、1978年）等で優れた業績をおさめられ、その後のアーサー王の研究でまさに円熟期を迎えようとしていた青山先生。私事で恐縮だが、ゼミ生の大半が西洋中世史を卒論のテーマとする中で、古代史、それも日本語で読める概説書もほとんどない分野を選んだ私を、「フェニキアのことをやるならまずこれを読みなさい」と教えてくださった本が、*The Cambridge Ancient History* である。辞書と格闘しながら必死で訳しまとめた大学ノートは、今も私の手元に残る大切な宝物だ。大学を卒業して数年後、先生のご著書『アーサー伝説－歴史とロマンスの交錯－』（岩波書店、1985年）の出版記念パーティーが開かれた時のこと、出席した同窓生の中で私が最年少ということで、突然、最後に花束を渡す役目が回ってきた。2ヵ月後に初めての出産を控えた私の身体を気遣ってくださった先生の言葉が印象的だった。奥様も英文学の高名な研究者でいらっしゃる、研究の傍らご家庭では父親・母親としての役割をとともに果たしてこられた、慈愛に満ちた先生のもう一つの姿を垣間見た気がした。

厳しかった先生のお顔が、晩年、次第に柔和になられた。ふと、私の知っている先生でないような気がして寂しかった。「青山先生、どうか私たちの永遠のアーサー王でいてください。」最後にこのように言って、先生にお別れをしようと思う。合掌。

(本学非常勤講師・新制31回史学科卒業生)

## 青山吉信先生を偲ぶ会 2006（平成18）年10月7日（土） 於 新泉山館

参列者はイングランド中世の宗教歌を思わせるBGMの中、白いカーネーションを一本手に取り、祭壇に向かいます。白いお花に囲まれたご遺影の目はくりっと輝き、頬はふっくらとしていらっしゃいます。図書館長として活躍されていた1984年4月から1988年3月は、私（新制39回生）が教えを受けていた時期に重なるようで、その当時の面影そのままでした。現在の図書館建物の上階に史学科研究室があり、学生の私はおそろおそろ訪ねた覚えがあります。図書館員になってからは、休憩室で図書館員の先輩方と談笑されているお姿を時折目にしていました。

ご遺影の傍らにはご著書多数と洋酒が二瓶。会が進むにつれ、その脇には洋酒が注がれたグラスが置かれました。教え子たちはご著書を手に取り、懐かしくページを開き、そして待ちかねている次の方に手渡す、という光景が見られました。

数々の方がお言葉を述べられました。歴代の学長、史学科の先生方、イギリス中世史研究会の方々、教え子たち。先生は学内では文学部長、図書館長、評議員、理事を務められました。著書を多数執筆しながらも日本女子大学への貢献も大きく、ちょうど日本女子大学が100周年に向け、総合大学として発展する時期に大変にお働きになったご様子が語られました。学内での先生のご様子を「アイロニカルな表情でいらした」と表現されたお言葉があり、聞いた皆が思わず先生のお顔を思い出したと思います。研究者としては適切な言葉を使う、言葉の選択が素晴らしかったとのこと。教え子からは、先生がまるでこの場にいらっしゃるよう、その柱の影に隠れていらっしゃるようだ、との言葉がありました。また、博士号をとる、と強い意志をもった電報も寄せられました。多数集まった回生もあり、先生の求心力を感じました。

この日は先生が亡くなってから百ヶ日にあたるそうです。ご遺言で公的なお別れの場を設けることを辞されたようですが、教え子が設けるのであれば、とご遺族にご了解をいただき、本日感謝とお別れの気持ちを表すことができました。青山先生、ありがとうございます。心よりご冥福をお祈り申し上げます。  
(館員・図書整理係 吉原三紀子)

### 青山吉信先生 日本女子大学における主な経歴

- 昭和34年4月～昭和41年3月 日本女子大学講師・助教授
- 昭和41年4月 文学部史学科教授に就任
- 昭和56年4月～昭和59年3月 文学部長
- 昭和59年4月～昭和63年3月 図書館長
- 昭和63年4月～平成4年3月 文学部長
- 平成4年3月 日本女子大学を定年退職
- 昭和59年4月～平成18年3月 図書館友の会上代タノ平和文庫運営委員



平成6年5月7日桜楓2号館会議室  
歴代館長座談会で歓談される青山先生

### 「日本女子大学図書館だより」青山吉信先生寄稿文献

- 図書館、この20年、そして No.61 1984.10 p1
- 〈座談会〉図書館のこれから No.61 1984.10 p6～16
- ヘイ・オン・ワイ No.62 1985.3 p1
- 贗作拜見 No.63 1985.5 p1
- 山口君鎮魂 No.63 1985.5 p3
- 図書館新增設に関し全学に訴える No.64 1985.10 p1
- 女子学生昨今 No.65 1986.3 p1
- 資料紹介『ロールズ・シリーズ』 No.66 1986.6 p2
- 言葉と文書と No.66 1987.3 p1
- 人間の値段・小指の値段 No.69 1987.6 p1
- 人生すべて浮き沈み No.70 1987.12 p1
- 幼児結婚 No.71 1988.3 p1
- 聴くことから読むことへ No.83 1992.3 p2
- 〈座談会〉図書館、この30年、そして No.90 1994.6 p3～19 \*歴代館長座談会
- 困った話 No.100 1997.12 p11

\*日本女子大学史学研究会発行「史艸」（第33号 1992.11 青山吉信教授退任記念号）に、青山吉信先生略年譜が掲載されている。

—大学生と図書館—

「日本女子大学卒は資料検索能力が秀でている」

秋元 樹

「日本女子大学卒は資料検索能力が秀でている」と貴女は自らを誇れたらよくないか？これが身に付けば一生の宝になる。人生には次から次に新たな答えるべき問いがやってくる。

< 図書の集積場所としての図書館 >

大学の2大心臓部は教室と図書館である。すべての教育機関にはこの二つがある。小学校1年生向けにも図書室がある。そして勉学が進めば進むほど後者のウェイトが高まる。ほとんどすべての大学には独立の図書館があり、その中でも2年、3年、4年、大学院と進むにしたがって貴女はここで費やす時間が増加する、のが一般的である。だから、たとえば、アメリカの「名門」ミシガン大学の図書館は夜中の2時まで開いている。

教室と図書館はどこが違うか？前者には先生がおりそこに身を運べば最低何とかなる——何かを教授され、導き又はコーチのサービスを受けることができる——が、後者には貴女自身が何か——与えられた課題か、自らに課したテーマか——を自ら持ち込み自ら行動しなければ何ともならない。だから図書館の方が少々敷居が高いのかも知れない。

貴女の図書館利用は一般には「資料（本その他）を探す」ためであろう。より正確に言うならば「資料を探し、答えを与えてくれるものを手にする」ためであろう。そして、直接答えを与えてくれる本があれば「いい図書館」であり、なければ「だめな図書館」となる。「何よ、この図書館ろくな本もない！」。その意味でも図書館の蔵書は一般には多ければ多いほどよい。これは図書の集積場所としての図書館への期待である。

< 資料検索の場としての図書館 >

貴女は図書館にもう一つのことを期待しても良い。貴女は、今、図書館に貴女の必要とする「資料を探し」に来たのだ。どこにどのような資料があるのか、これを見つけ出す。これを見つければあとは現物を入手するだけだ。そのためのエネルギーと時間を支出すればよい。

「直接の答えを与えてくれるもの」を手にする前段階である。実はこれがそう易しくない。所蔵図書が少なければ何も見つからず途方に暮れるであろうし、膨大であったらあったでその山の前で途方に暮れるであろう。

どうするか？図書館にはこれを乗り越える手だてが用意されている。一つはレファランス・サービスでありもう一つはコンピュータによる検索システムである。貴女はこれらを使いこなしているか？あるいはこれらサービスの善し悪しをもって図書館を評価するのも一法だろう。

図書館にはライブラリアン（司書）と呼ばれるすばらしい能力を持ったプロがいる。貴女が自ら多くの努力をし、また勉強していればいるほど彼（女）たちは手をさしのべてくれるであろう。

学生はコンピュータのキーをたたくのはお手のものだ。ヤフーやグーグルの四角い窓にキーワードを放り込む。瞬時に貴女の求める直接の答えが返ってくる。Wikipediaを含めて。ここで「検索システム」というのは、このレベルを超えた次のステップである。NACSIS Webcat や ProQuest その他である。その進歩は年々著しい。誰かの導入の手伝いが少々必要かも知れない。

「日本女子大学卒は資料検索能力が秀でている」との社会的評価が獲得できるように、「品質保証」の検印をつけて学生を世に送り出すためには、大学はあるいは大学図書館は何ができるか、何をしなければならないか？教室との連携は必要ないか？おそらく資料検索能力というのは、語学などと同じように、すべての学生が最低身につけていなければならない「技術」「能力」なのだろう。

（社会福祉学科教授）



—大学生と図書館—

## 論文教育を支えるライブラリー・ツアー

佐藤 和哉

本学の英文学科は英語の四技能のなかでも、とくに「英語を書くこと」に力を入れている。それも、ビジネスレターや電子メールが書ければよいというものではなく、学生みなさんに英文で論文を書く修行を課している。いきなりA4判で30枚の卒業論文を書こうと書いて書けるものではないから、本学科では、1年次からさまざまな英文作成の技法を練習してもらおう。なかでも2年生で履修する「英語論文作成法Ⅰ」は、ただ英文をつづるだけの「英作文」から「英語論文」を書くことへのステップとしてきわめて重要である。

この授業では、英語論文を作成するうえでの文章の構成法と、先行研究や資料の正しい引用のしかたを訓練したうえで、実際に自分の関心にしがたって小論文を書く。このために夏休みに資料を探して読んでおいてもらわなければならないが、英語論文を書くためには英文で書かれた資料を検索して入手し、必要であるかどうか吟味したうえで自分の論文に適切に引用しなければならない。このプロセスの最初の作業の要は資料検索である。そこでいつも図書館にご協力いただいているのが、この授業の一環として行う「ライブラリー・ツアー」だ。

「英語論文作成法Ⅰ」の前期の終わりごろに、図書館参考係の館員の方のお手を煩わせて、授業時間1回分を使って図書館の検索システムを説明していただいている。資料探しの第一歩は何と言っても本学図書館である。本学図書館のホームページからすぐに「蔵書検索」が行えるし、検索システムが改善されて使いやすくなった。目白と西生田を合わせれば相当範囲の学習内容はカバーできる。しかし、近年の英文学科の学生たちが興味を持つ対象は、伝統的な文学研究の枠を越えて、映画・音楽・広告などのメディア・ミックス的な展開を見せるとともに、英語圏の人びとのさまざまな生活の営みの歴史について研究しようと、めざましい広がりを見せるようになってきた。いかに本学の図書館の蔵書が充実していようと、なかなか全ての学生みなさんの知的好奇心を満たすことはできない。そこで大きな力を発揮するのが、「学外サーバ」による検索である。日本国内の研究機関・大学の蔵書検索ができるNACSIS Webcat、あるテーマ（検索語句）から雑誌、図書などがまとめて検索できる学術検索ポータルGeNii、そして英文論文執筆に欠かせない英文資料については、ProQuestやMLAなどのデータベースが絶大な威力を発揮する。これらの学外のデータベースが使える環境にあるということで、本学の学生みなさんは本当に恵まれている。しかも、上記のライブラリー・ツアーでは、データベースの使いかたを懇切丁寧に指導していただいている。このレクチャーのおかげで、学生たちは一通りデータベースが使えるようになる。これらのデータベースで全文がネット上にあればそれをダウンロードするだけだし、そうでない場合でも、WebcatやGeNiiで所蔵機関を探せば、他大であっても、図書館からの紹介状でその資料にまでたどり着くことができる。ここでもまた参考係のみなさまのお世話になっている。

個人的には、今後の課題は自分自身でこれらを使いこなし、有効かつ効率的な検索方法を発見して教育に生かすことだと考えている。いずれのデータベースにおいても、的確に自分が求めているような種類の資料を探し当てるのには、相応の「慣れ」が必要である。広すぎる検索条件では、目を通すことのできないような件数のヒットが出てしまうし、あまり狭く指定すれば、思うようなものが何も出てこない。この辺りに精通できるようになるまで自ら使いこなせるようにならなければ、まさに宝の持ち腐れというものであろう。教師であるまえに、ユーザーとしてもまだまだ図書館のみなさまにご指導をいただかなければならないようだ。

なお、この授業は、学生数によって毎年9～11クラス開講されているから、いつも10回前後、同じ説明をしていただくことになる。図書館のみなさまのご支援に心から感謝する。この場を借りてお礼を申し上げたい。

(英文学科助教授)

## —大学生と図書館—

## 目白における図書館ガイダンスについて

飯山 智子

何か目的をもって本や雑誌の論文を探しているとき、例えばレポートや卒論に必要な資料を探すときに学生のみなさんは目指す資料にうまくどりつけているだろうか。

図書館では、より効率的に図書館とその資料を使ってもらうために、毎年何種類かの利用案内を行っている。例年のものとして、4月にオリエンテーション、そして授業やゼミのテーマに添った資料の探し方を案内する「図書館ガイダンス」を希望に応じて、適宜行っている。加えて今年度は5月に、本学で利用できるデータベースの紹介とその使い方を説明する文献探索のガイダンスも行った。オリエンテーションについては、学部の新入生に向けての「新入生オリエンテーション」を長い間行ってきたが、最近を対象の幅を広げ新大学院生や新任教員向けのものも実施している。

「図書館ガイダンス」は主に先生から依頼されて授業やゼミ単位で行っているものだが、近年依頼が増え、昨年度は約30回に上った。今までは文学部からの依頼が多かったが、最近では家政学部や理学部の先生方からも増加している。ガイダンスの内容も時代によって変化してきた。図書館の機能がコンピュータ化される以前は、カード目録の引き方・冊子体目録の使い方・目録から探し出した雑誌論文の入手方法などが説明の中心であった。それがコンピュータの普及によって、カード目録の引き方はOPACの使い方になり、冊子体目録の利用法は索引データベースの検索方法へ変わり、雑誌論文入手のためにオンラインジャーナルの探し方が必要となった。コンピュータ化の前は、手間がかかったにしろ冊子やカード目録を引くといった比較的単純な手順の繰り返しで資料を集めることができた。今はキーボードをたたくという一つの操作によって、様々なものが検索できるようになり手間は減った。しかしその操作の簡便さゆえに、今自分が何を検索しているのかわかりづらくなった。同じ（ように見える）データベースのどれをどう使えば必要な文献までどりつけるのかを理解することが、冊子体目録の時代以上に複雑化したのである。そのため今では、各種データベースの特徴や検索方法という説明に多くの時間をかけるようにしている。

図書館資料を使いこなすには、ある程度の知識とコツが必要である。多くの学生の方にそれを知ってもらうには、授業と連携して行うのが効率的なのだがそれはなかなか難しい。その中で「図書館ガイダンス」を三十年近く前から毎年ご依頼くださるのが、英文学科の「英語論文作成法Ⅰ」「同Ⅱ」の先生方である。これは2年および3年生が一年かけて小論文を書く授業だが、その資料集めのために必要なツールや手順を説明している。先生方はこのガイダンスを「ライブラリー・ツアー」と称されている。かつては短い時間の中で目録カードやOPACの利用方法を説明した後、まさに館内を「ツアー」して資料の案内も行っていった。現在は館内の多目的室という部屋で、検索実習も兼ねてすべての説明を行うようにしたため、館内を回る時間はとれなくなった。とはいえ近年は授業のまる1回分を充ててくださるようになったので、データベース等のより詳しい説明が可能になった。さらに二、三年前からは学科でこのガイダンスを2年生の授業のスケジュールに組み入れてくださった。今まで長年行ってきたことを先生方が評価してくださったように思え感謝している。



英文学科へのガイダンス風景

「図書館ガイダンス」は、その有用性をご理解くださった先生は毎年ご依頼くださる。昨年からは児童学科が、1年生全員が対象の授業の1回分を「図書館ガイダンス」に充ててくださるようになり、ここでも必要性が認められたと思っている。それに応えるためにも今後ともより充実した内容にしていきたい。

(館員・参考係)

—大学生と図書館—

西生田図書館における資料検索講習会について

水嶋 寿恵

皆さんは日頃どのデータベースやサーバをよく利用していますか？図書館のHPには毎日アクセスしていますか？

「インターネットはいつも使っているから大丈夫、何でも Google かなんかで探せばいいし、使いこなせてるし。図書館のHPなんか見なくても平気。図書館で使い方を聞くのも面倒だし、聞いてもたいしたことないでしょ。わからない時は友達に聞けばいい。」なんて声も聞こえてきそう。でも、どうでしょう。そこのあなた、あなたはとても損をしているかも。

図書館で尋ねてくださった方、さらに、図書館の資料検索講習会に参加してくださった方、皆さんがおっしゃいます。「知らなかった！」「便利なんですね！」「こうやって調べるんですね！」そうです。図書館は便利。そして、どんなに質問してもいいんです。知らないままで、利用しないままで卒業するなんて、ああ、もったいない。

大学生のある時期に得た知識は、時代が変われば、古くなってしまいかもしれません。でも、何かを学びたい時、知りたい時にどのように調べるのか、というもっとも基本的な姿勢は、大学にいる間に身につければ、卒業後も様々な場面でずっと役に立ちます。

本学の図書館ホームページでご案内しているデータベースやオンラインジャーナルにどのようなものがあり、何を探す時にどれを使うのか、どうやって使うのか、慣れれば便利なのですが、最初は戸惑うことも多いはず。また、使いこなしているつもりでも、実は、使える機能のほんの一部分しか利用していなかったり、たまたまヒットしたデータだけを見て、資料が少ないと思っている場合もあります。資料探しに時間がかかりすぎ、大切な時間を無駄にしているかもしれません。

なんとかして、皆さんに資料検索の最新情報をお伝えすべく、西生田図書館では、毎年5月から6月にかけて「資料検索講習会」を開催しています。今年は「蔵書検索編」、「データベース日本語編」、「データベース英語編」という3通りの講習会を36回開催、延べ86名の方が参加されました。

毎年、講習会の内容やテキストは改訂を重ねています。1年前と比べると、ほとんどのデータベースに新機能が追加されますし、また、新たに導入するデータベースもあります。もちろん、図書館の蔵書だって、1年で何千冊も増えています。では、実際、この1年半くらいの間に、図書館のデータベースにどれほどの新たな動きがあったのか、ざっとご紹介しましょう。

2005年4月に始まった CiNii は、今や多くの方々に利用される雑誌論文検索ツールとなりました。提供開始から、まだ1年半ということが信じられないくらい定着しており、図書館でも利用している方を多くお見かけします。2005年7月には ProQuest にアラート機能が追加されました。自分の研究のキーワードを登録しておけば、そのワードを含む論文が新たに掲載された時、登録したメールアドレスへ知らせてくれます。現在は他の英文データベースでも一般的な機能です。

2006年の動きでは、1月以降、新たに利用可能となった JSTOR, Marquis Who' Who があります。4月からは文献管理ツール RefWorks が加わったほか、JDreamII (旧JDream) が機能を充実してスタート、さらに、聞蔵II (朝日新聞オンライン版) も1945年以降の記事が利用可能になっています。6月からは Oxford University Press と SpringerLink のアーカイブが NII-REO より利用可能となりました。

このように、あふれる情報の中から効率よく必要なものを探し出し、皆さんの研究や勉強の一助になるため、図書館は日々成長を続けてます。是非、皆さんも1年に一度は講習会に参加し、研究にお役立てください。

最後に、当講習会へ多大なるご理解ご協力をお寄せくださいました、尾中先生、秋元先生、木村先生、内藤先生、増田先生に、心よりお礼申し上げます。

(館員・西生田図書館)

## 平成18年度夏期スクーリング開館について

今年の夏期スクーリング開館は7月31日（月）から8月26日（土）までの4週間で、昨年同様に24日間でした。

毎年、通信教育課程の学生が通学して集中授業を受ける夏期スクーリングの期間、目白キャンパスの図書館では、スクーリング生向けにも準備をして開館しているため、夏期スクーリング開館と名づけ、日曜を除き毎日開館しています。

夏期スクーリング開館の間は、通信教育図書室の資料は通信教育課程の学生に限って貸出しています。

通信教育事務部や担当教員への連絡、館員内での確認事項、スクーリング生向けの各種配布資料や利用カード交付準備など、様々な準備をして、さて開館となったのですが、例年と比べてカウンターも検索用端末も閲覧席も混むことがほとんど無く、館内に設置した配布資料も残ってしまいました。

今年の利用状況は左下の表のとおりです。受講者数自体が減少し、図書館の利用もほぼ全ての項目で減少しました。講義の合間や終了後に利用が一時集中したコピーも、総数としては減少でした。

夏期スクーリング開館の利用状況

年度	18	17	16
開館日数	24	24	24
入館者数	6,627	8,436	9,331
1日平均	277	352	389
最高	534	471	516
最低	191	219	279
受講者数	1,753	1,989	2,192
登録者数	809	970	1,064
1日平均	34	41	45
貸出冊数	2,740	3,625	4,410
1人当たり	4	4	4
1日平均	115	152	184
最高	210	279	334
最低	63	72	96
貸出日数	24	24	24
複写枚数	22,179	26,899	37,057
1日平均	925	1,120	1,545
一般学生・教職員 その他の貸出	1,500	1,637	1,925
1日平均	63	69	81



スクーリング初日の2階カウンター

通信教育課程では年々履修方法の選択肢が広がっており、夏期スクーリング以外にも土曜スクーリングや東京及び地方での集中授業、放送大学での受講などでも何単位かを取得できるなど、学び方も学ぶ時期も多様化してきていることは、原因の一つと考えられます。

図書館としては、少しでも利用しやすくなるように、もっと工夫して準備したいと思います。スクーリングの受講の有無は問いませんのでスクーリング生ではない通信教育課程の学生もぜひご利用ください。ただ、開館時間が通常期と異なりますので、図書館ホームページの開館日程や『女子大通信』等ご覧いただければと思います。

(館員・閲覧係 田代陽子)

参考係利用状況（質問処理件数）

年度（日数）	18 (15)	17 (20)	16 (20)
一般学生・教職員	38	57	76
スクーリング生・その他	56	96	82
合計	94	153	158
1日平均	6.3	6.7	7.9

**編集後記** 「図書館新增設に関し全学に訴える」1985年10月発行の図書館だより、青山吉信館長巻頭言である。当時すでに図書館（目白）の書架スペースは適正な資料収容が困難な状態に至っていた。以来20年、若干の対策によりしのぎつつ抜本的な解決はまだまだ先の事柄である。あらためて青山先生のメッセージを読み来し方行く末を考える。館員を牽引しながら人參嫌いの微笑ましい一面も見せてくださる館長であった。合掌。図書館実施の講習会について教員の視点から寄稿をいただき、同様の観点で館員も執筆した。今号の各執筆者の方々に心よりお礼申し上げる。

平成18年度図書館だより編集委員：中曾根緑、堀英理子、鈴木学、大沼真美。7月より堀館員を増強して出発する。(中曾根)